藤田浩子の 少し昔のこと〈88〉

立派なおむつ

紙おむつが使われ始めたのは 1970 年代です。それも全国的に普及したのは 1970 年も後半だと思います。1960 年代にもアメリカから輸入したものを使っていた人もいたそうですし、日本でも研究が進んでいましたから、都会の人は使い始めていたのかもしれませんが、私が子育てをしていた福島では、なかなかお目にかかれませんでした。

布おむつはオシッコをした後、びちょびちょになるし、おむつカバーも市販のゴム製品は赤ちゃんの肌がかぶれたりしてかわいそうでしたから、私はフェルト状になったセーターで作った手製のおむつカバーを使っていました。

ただこれは通気性がいい代わりにオシッコも通すというわけで、負ぶっている私の服まで濡れることもしょっちゅうでした。私は、オシッコは通さないけれど通気性がいい、しかも赤ちゃんにびちゃびちゃ感のない、そういうおむつはないものかと思っていました。

そこに「通気性がよく、保水性もよく、肌に触れる部分は常にさらさら」というううたい文句であの立派なおむつが登場したのです（初期のものはいろいろ不備もありましたが）。これぞ理想のおむつ、私が望んでいたおむつ、おむつ革命だとさえ思いました。保水性がいいので、朝も一晩中ためたオシッコをおむつにされても布団を濡らすことはありません。ですから朝、目覚めと同時にトイレに連れて行く「朝シォン」は不要になったのです。そして赤ちゃんは、オシッコを直接出す機会を失ってしまいました。赤ちゃんは「オシッコはおむつにするもの」と思いこまされ、それが身についてしまったのです。オシッコをおむつにすることに何の違和感もなく、むしろ安心してオシッコを出せるので、3歳になっても4歳になっても、おむつをはずしたがらないのではないでしょうか。

リレー連載 ＜221＞

わたしの大好きな絵本

みっちゃん（元楽々会）

長引くコロナ、そして 21 世紀においてまさかの戦争、混乱を極めた世情の中で、生きていく為に希望の支えになるメッセージや言葉を探し続けています。

こんな時には、どのような絵本なら手に取って読みたいか自分に正直に考えてみました。

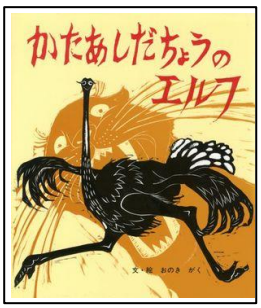
頭に浮かんだのは「かたあしだちょうのエルフ」でした。

画家のおのきがく氏の絵本で、まるで版画作品集のようで、構図の大胆さと濃淡、差し色のセンスに魅了され続けています。

『かたあしだちょうのエルフ』
文・絵　おのきがく
ポプラ社

ここではあらすじを省略しますが、弱き者を守ろうとするだちょうのエルフの雄々しさ、不屈さ、そして自己犠牲の姿が描かれ、最後にはあっと驚く展開となっています。

是非一度手に取っていただきたい絵本です。



私達はたくさんの犠牲の上に立っている、それを忘れてはならないという事を繰り返し認識させられ、ウクライナにも重ねて思を馳せてしまう深い絵本なのであります。